

国内経済情勢

概 観

景気は引続き緩やかな回復基調にあるが、内外需ともこのところ伸びがやや鈍っており、8月の生産は3ヵ月ぶりに減少した。

この間商品市況は小幅軟化を示し、卸売物価の騰勢もひとところに比べ鈍化したが、これまで比較的落着いていた消費者物価は季節的要因や公共性料金引上げなどから9月には大幅な上昇となった。

金融面では、企業の資金需要は総じて鎮静基調を続けており、8月のマネーサプライ前年比は前月に続いてやや低下した。

8月の国際収支は、貿易収支の黒字幅がかなり縮小したうえ、長期資本収支も流出超過となったため、総合収支の黒字は小幅となった。

生産、出荷ともやや減少

8月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比 -0.8% (前月同 $+2.2\%$)と前2ヵ月増加のあと小幅減少となった。

これは、鉄鋼、電気機械、石油等は増加したものの、非鉄、金属製品、一般機械、窯業等が減少したほか、自動車および関連業種が一斉休暇もあってかなりの減少となったことが大きく響いたためである。

一方鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比 -0.1% (前月同 $+0.6\%$)と4ヵ月ぶりにわずか

ながら減少した(船舶を除くと同 -1.1%)。

財別にみると、前月減少した資本財輸送機械が船舶を主体に増加したほか、非耐久消費財(灯油等)も幾分増加した反面、耐久消費財(小型乗用車等)がかなりの減少となり、生産財も非鉄加工品、合成樹脂等を中心に減少した。

この間生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比 -0.1% (前月同 $+0.1\%$)の微減となった。これは、土木建設機械、産業用電気機械、合成樹脂等は増加したが、自動車がかなりの減少を示したほか、鉄鋼、非鉄地金、板紙などが引続き減少したためである。なお生産者製品在庫率(45年=100)は119.4と前月比横ばいとなった。

8月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、土木建設機械、繊維機械が減少を続けたものの、運搬機械(コンベア、エレベーター)、金属加工機械(圧延機械等)などが引続き増加したため、前月比 $+1.3\%$ と前月(同 $+5.0\%$)に続いて増加した。一方機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は前月比 -10.6% と減少したが、これは製造業向けは自動車、化学を中心に増加したものの、電力向けが前月に続いてかなりの減少をみたためである。また建設工事受注額(民間産業分、季節調整済み、速報)は前月比 -8.6% と前月増加(同 $+9.9\%$)のあと減少した。

7月の新設住宅着工戸数(季節調整済み)は、引続き高水準ながら前月比 -5.9% と減少した(前年同月比 $+11.7\%$)。

8月の全国百貨店売上高(季節調整済み、速報)は、前月やや持直しのあと、夏物セール等による衣料品の伸びなどから前月比+2.0%の増加となった。一方9月の乗用車新車登録台数(季節調整済み)は、秋需期を迎えたものの出足はやや伸び悩み、前月比-7.4%の減少となった。

8月の労働関係指標の動きをみると、有効求人倍率は有効求人、求職ともに若干減少したため0.67倍と前月と変らなかったが、これまで減少傾向にあった常用雇用は前月比横ばいとなった。

商品市況は小幅軟化

9月の商品市況をみると、アルミ、板紙等一部の商品は上伸傾向を続けたものの、鉄鋼が条鋼類中心に反落したほか、銅、合繊、そ毛糸、石油製品等も幾分下押すなど、総じてみると前月弱保合いのあと小幅軟化となった。これは、海外原料品市況の落着きが continuing のほか、需要面でも輸出の伸び悩みや国鉄・電電の発注抑制の影響がうかがわれ、さらに一部商品では販価引上げ前の仮需の反動も響いている。

卸売物価は8月に前月比+0.5%の上昇を示し、9月に入って上旬は前旬比+0.2%となったあと、中旬は上記市況商品の軟化や食料品の値下りから同-0.1%と久方ぶりの下落となった。

一方、9月の消費者物価(東京、速報)は、衣料品の秋冬物への入換えに伴う上昇のほか、電力料金・消費者米価の引上げ、台風の影響等による季節商品の高騰もあって前月比+2.8%の大幅上昇(前月同-1.0%)となった(前年同月比+9.3%)。

資金需要の鎮静基調続く

9月の金融市場をみると、銀行券は104億円の還収超(前年同615億円)となった。一方財政資金は、税込増や国鉄支払減等から一般財政の払超幅

は前年比やや縮小したものの、国債発行額が証券引受分に限られたため全体としては8,100億円の払超となった(前年同4,815億円)。この結果その他勘定を合わせた月中の資金余剰額は7,740億円と前年(同4,861億円)をかなり上回ったが、これは主として日本銀行の買入手形の期日落ちによって調整された。

この間コール・手形売買市場では、季節的資金余剰期入りから需給は緩和気味に推移し、手形売買レートは1日から、コール・レートは7日からそれぞれ0.25%低下したほか、更月後の10月4日にはコール・レートがさらに0.25%低下した(低下後のコール無条件もの出し手レート6.75%、手形買い手レート7.5%)。

9月の銀行券平均発行残高は、前年同月比+11.0%と前月(同+10.3%)に比べやや伸び率を高めた。一方、8月のマネーサプライ(M₂、平残)前年比は、預金通貨の伸び悩みから+15.2%と前月(同+15.5%)に続いて幾分低下した。

8月の全国銀行貸出は月中6,694億円増と、増加額は月末休日により高どまりとなった前年(8,614億円増)をかなり下回り、月末残高の前年比伸び率も+11.1%(前月+11.4%)となった。

企業の資金需要をみると、中堅、中小企業の一部(自動車・弱電下請、流通・住宅関連等)で増産、増販に伴う資金需要がみられ、また商社等の輸入関連資金などにも増加傾向がうかがわれるが、総じてみると収益改善に伴う自己資金の増加や慎重な生産態度などを映じ、製造業大企業を中心に鎮静基調を続けている。これに対し金融機関の融資態度は弾力的であるが、貸出の健全性確保には引き続き慎重な配慮をはらっている。

8月の全国銀行貸出約定平均金利は月中-0.009

%と低下を続け、昨年4月以降の通算低下幅は1.190%となった。

9月の公社債市況は、冷水害の被害に伴う影響を懸念する農林系統金融機関など買い手筋が手控え姿勢に転じたため、手持ち玉のかさんだ一部証券の売急ぎもあって、幾分軟化した。一方株式市況は月初急伸のあと、信用取引買残の膨張等がいや気され月末近くまで弱含みもみ合い商状が続けたが、月末にかけて反発し結局旧ダウ4,830円(前月末4,738円)で越月した。

輸入の増勢続く

8月の国際収支は、貿易収支の黒字幅が輸入の増勢や輸出の季節的減少などからかなりの縮小を示し、長期資本収支も国際機関への出資や海外借款供与等から再び流出超過となったため、総合収支では107百万ドルの小幅黒字となった。

8月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前月比-1.3%と前月に続いて若干の減少となった。これは、自動車、鉄鋼等は幾分増加したものの、繊維、化学製品の減勢のほか、昨年来急増を続け

てきたテレビ等弱電製品もこのところ伸び悩んでいるためである。

地域別にみると、中近東、アフリカ向けが増加したものの、米国向けが弱電製品、繊維等を中心に減少となったほか、東南アジア、共産圏向けも減少を示した。

他方輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月比+3.9%と3か月連続の増加となった。これは輸入価格が木材、非鉄鉱石を中心に引続き上昇したほか、原油、繊維原料、食料品等の入着が増加したためである。

9月のインターバンク米ドル直物相場は、海外からの円需要や為銀の手許取崩しなどから月央にかけて軟化し、286円30銭まで下押したあと、下旬には小戻して287円台中心の小動きを続けた(月末287円30銭)。

9月の外貨準備高は月中198百万ドル増加し、月末残高は16,489百万ドルとなった。

(昭和51年10月8日)